

葛尾村斎藤里内応急仮設住宅プロジェクトⅡ

「復興」は、ここからはじめよう。

活動最終報告書

2015年3月

福島大学ビックブラックゼミナール

○「葛尾村斎藤里内応急仮設住宅プロジェクト」のはじまり

私たち、福島大学現代教養コースのビックブラックゼミナールでは、2013年度から2年間、福島県三春町にある葛尾村の「斎藤里内応急仮設住宅」のみなさんとともに、福島県の「大学生の力を活かした集落復興支援事業」の調査・実証実験の活動を行ってきた。

ビックブラックゼミナールは、福島大学現代教養コースと行政政策学類の学生で作った、この事業のためのゼミグループ。2年間のゼミのテーマは、「偉大な革命家になろう！」というもので、私たちの社会が抱える課題をとりあげ、「お金」の力ではなく「人のつながり」がもつ力で、少しでもよりよい社会を目指す活動と学びを創るゼミである。私たちは、2011年3月11日に発生した東日本大震災後の東京電力福島第一原発事故によって、全村避難を余儀なくされ、三春町の斎藤里内応急仮設住宅に避難された葛尾村の118名のみなさんとともに、仮設住宅のみなさんの「復興」とは何かを考え、この難しい問いに対する私たちなりの結論に基づいて活動を作ってきた。十分なことができたとは思っていないが、この活動を振り返り、その成果を確認するとともに、反省点も見つめ、今後の活動につなげていきたい。

○「応急仮設住宅」における「復興」とは？

私たちが活動のはじめに直面したのが、「原発災害による避難のために設置された応急仮設住宅における『復興』とは、どのようなものなのか」、という問題である。「仮設住宅における復興」というものが私たちの課題であることは、福島県の事業に手を挙げ、また契約書を交わした時から明らかだった。実際、「仮設住宅における復興」という言葉で何が意味されているのかは、当初、まったくわからなかったのである。プロジェクトの開始にあたって直面した難問であった。

テレビや新聞報道など、一般的ないわゆる「世の中」が想定している「復興」とは、たとえば、

- ・福島県にたくさんの人が訪れるようになる
- ・福島県産の農産物が売れるようになる
- ・福島県に復興にむけた(高速)道路ができる

などであろう。こうしたことは、福島県全体の「復興」にとって重要なことかもしれない。さらに、再生可能エネルギーの大規模施設の建設などを、この「復興リスト」に加えることもできよう。

しかしながら、斎藤里内のように、原子力災害によって全村避難が余儀なくされ、現在仮設住宅

にお住まいの方々にとって、とりわけ高齢者の皆さんの日々の生活にとって、こうした「福島県全体の復興」が、実際に、どのような意味があるのか、と私たちは考えざるを得なかった。

たとえば大規模な太陽光パネルの設置が「福島県の復興」にとっては大切なことでも、仮設住宅に住むの方々にとって意味がないなら、この「復興」は、仮設住宅に住む人々を素通りして進む「復興」ではないだろうか。「仮設住宅における復興」を課題とする私たちは、ここ斎藤里内仮設を素通りすることのない「復興」を目指すべきではないのだろうか。

この思いが私たちの活動の出発点となった。私たちにとって「復興」とは、仮設住宅やその住民の皆さんを素通りするのではなく、まず避難せざるを得なくなった人たちにとって、直接意味のある復興でなくてはならない。「復興はここからはじめよう」、これが私たちの合言葉となった。そして、私たちが目指す復興は、斎藤里内仮設に住む人たちが、以前の葛尾村での「日常生活」を可能な限り取り戻すことから始めることが大切だということに気が付いた。そこから出発して、最終的にそれが福島県全体の復興につながるのかどうかは、あらかじめ見通すことはできない。しかし、そこから始めなければ、この災害によってもっとも大変な思いをしている人々を置き去りにした、空疎な「復興」になりかねないのではないか。そして、「ここからはじめる復興」は、そうした試みが各地で積み重ねられることによって、きっと福島全体の復興へとつながるはずだと考える。

私たちビックブラックゼミナールの目指す活動は、仮設住宅に住む人たちが以前の葛尾村での日常生活を取り戻すことを目標とする。仮設住宅という困難な条件の中で、その目標がどこまで可能なのか、手探りしながらの活動となった。

○2013年度の振り返りから2014年度の活動を創る

まずは、2013年度の活動を振り返って総括しておく。2013年度は、3つのプロジェクトを実施した(概要は昨年度の報告書を参照のこと)。

- (1) 緑のカーテンプロジェクト(4月)
- (2) 梅干しづくり(春～夏)
- (3) お正月料理作り(12月)

2013年度の活動を通じて得られた2014年度への活動指針は、以下の3点にまとめられる。

第1に、プロジェクトは、農業(とそれにまつわる作業)を活動の中心に組み立てること。農業は単なる作業ではなく、農業を通じて「生きがい」「コミュニケーション」「喜び」という生活を豊かにするためのきっかけとして重視するということである。

第2に、仮設の高齢者は支援の「対象」ではなく、あくまで復興の「担い手」であるということ。仮設住宅にお住まいの高齢者は、決して支援の「対象」ではなく、あくまで復興の「担い手」だということが忘れられがちであるように感じる。仮設住宅の皆さんは、「家族や集落のために自分でできることがあるなら、ぜひやりたい！」という前向きな気持ちをお持ちである。その気持ちを形にすることが重要である。

そして第3に、葛尾村の人々の日常生活の中に潜む力を発揮してもらうことが「復興」の出発点となる、ということ。葛尾村の人々は、長年の故郷での日常生活のなかで身に着けた様々な技や力をお持ちである。そうした技や力をきちんと掘り起し、それを発揮していただくことで、仮設住宅から始まる「復興」の形を描くことが可能になる。震災によって奪われたこうした日常生活を取り戻すことができれば、仮設住宅を素通りするのではなく、ここから始まる復興が始動するはずである。

こうした2013年度の調査と活動の成果を活かし、2014年度の活動はどう組み立てられるべきか、グループ内でアイデアを出し合い、仮設住宅のみなさんとの協議を進めた結果、2014年度の活動は、「日常生活に潜む力をとりもどす試み」として、以下の4つのプロジェクトを企画し、実施することとした。

- (1) 緑のカーテンプロジェクトパートⅡ (4月)
- (2) 味噌づくり・梅干しづくりプロジェクト (3月/4月～8月)
- (3) お正月料理&しめ縄作りプロジェクト (12月)
- (4) 干し柿づくり (12月)

以下、写真とともに、それぞれのプロジェクトを紹介する。

○緑のカーテンプロジェクトパートⅡ

2013年度から継続して行った活動。プランターではあるが、ナスやトマトを仮設の住民の方々に育てて頂き、小さな農業を復活させることができた。2枚の写真は、イベント当日のもので、私たち





学生と仮設住宅の住民のみなさんとの交流も進み、とても楽しいイベントになった。私たちが、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」を踊り、私たちが手作りしたクッキーをお配りしたところ、そのお返しとして、仮設住宅のみなさんが「葛尾川」という盆踊りを披露してくださったことは、忘れられない思い出となった。

○味噌づくり・梅干しづくりプロジェクト

こちらも昨年からの継続した活動であるが、昨年度の梅干しづくりに加え、2014年度は味噌づくりも行った。梅干し作りに使用した梅は、仙台市根白石中学校から提供されたもので、県外の中学生との斎藤里内仮設住宅との新たなつながりが生まれた。この活動を通じて、仙台の中学生に福島原発の現状を伝えることができたこと、また彼ら中学生が、斎藤里内仮設の皆さんの「復興」への取り組みを支えることに寄与するきっかけを作り出したことは、2014年度の新たな成果でもあった。中学生と大学生との交流は、その後も、「交流野球試合」などの形で継続している。

味噌は私たちビックブラックゼミナールのメンバーを、「ばっち息子」と呼んでくださった仮設の皆さんが「ばっち息子が材料を集めてきてくれたからできた味噌だ」、と喜んでくれたことから「ばっち息子の味噌」と名付けてた。ちなみに「ばっち息子」とは、阿武隈地域の方言で「末息子」という意味である。





○お正月料理&しめ縄づくり

きっかけがあれば、家族や集落、仮設住宅に住む人たちのために、やれることはやってみたいという、仮設の皆さんの気持ちを形にしたいという思いで、仮設住宅に住む皆さんにご協力いただきながら実施した事業である。料理作りは仮設住宅の女性の皆さん方を中心に、そして、しめ縄づくりは、男性の皆さんが集まって進めていただいた。仮設住宅のお住まいの皆さんの、前向きな気持ちを実際に形にすることができた活動となったことは、とてもうれしい成果である。しめ縄づくりを行ったことで男性の参加が増え、2014年度は前年度よりも多くの方に参加していただくことができたイベントとなった。しめ縄づくりのための稲わらを、斎藤里内仮設の周辺にお住いの三春町の方にご提供いただいたが、仮設住宅とその周辺住民の皆さんの交流も、少しずつ広がっている。このプロジェクトの成果の一つでもある。





○干し柿づくり

ビックブラックゼミナールの学生11人と葛尾村仮設の方々との共同作業である。愛媛県の方から格安でご提供いただいた渋柿420個約 120 キロを、2 人 1 組で 20 個ずつ干し柿へ加工した。イベントに参加した人もしなかった人も、仮設の皆さんに柿を配ることができた。みなさん、近所の人たちのことを気にして、「〇〇さんにも配っぺ」、と作業をしてくださった。葛尾村ではみんな普通にしていたことで、避難によってできない、あるいはやらなくなってしまったが、「きっかけがあればぜひやりたい」、との声を受けて実施できたことは大きな成果である。参加してくださった仮設住宅のみなさんは、だれもがてきぱきときれいな手仕事で進め、私たち学生は多くのことを学んだ。葛尾村の日常生活の中で自然と培われていた手仕事の技や力を実感する 1 日となった。それを、再び復活できたのは、私たちとしては、本当にうれしい。





○2014 年度の活動を振り返って

2014 年度の活動を始めるにあたり定めた 3 つの指針は達成されただろうか。その確認をしておく。

まず第 1 に、農業(とそれにまつわる作業)を活動の中心にという指針をめぐって。

トマトやナスの栽培や梅干し、しめ縄や干し柿は、大地がつくり出すものに人が手を加えて作り上げるものである。その過程で生きがい生まれ、1人1人の個性が発揮されるものである。一連の過程で、根白石中学校との交流という新たな成果も生まれた。農業が持っている役割を、仮設住宅での日常生活の中で、これまでより充実した形で復活させよう、という意図は、実現できたようにおも割れる。

第 2 に、仮設の高齢者は支援の「対象」ではなく、あくまで復興の「担い手」、という点に関して。

さまざまな活動に積極的に参加して、家庭や集落、ご近所さんのために自分のできることはやろう！という仮設の方々の前向きな気持ちは、干し柿づくりやしめ縄づくり、正月料理作りなどで、形となった。本当は力も技もアイデアもあるが、それがうまく見えない、現れていないときに、そうしたものを引き出すためのきっかけをどう工夫するか、私たち学生にとっても、貴重な学びの機会となっ

た。

第3に、葛尾村の人々の日常生活のなかに潜む力を発揮してもらうことで、ここから始まる復興の道筋を示すという指針について。斎藤里内仮設住宅にお住いの方々の、普段の何気ない日常生活の中に潜む力を発揮してもらうことで、葛尾村やさらには福島復興につながる第一歩にする——これが3つ目の目標であった。一連の活動を通じて、斎藤里内仮設住宅のみなさんが、長年の葛尾村での生活の中で身につけていた手技や、加工食品、料理の腕には、大きな力が宿っていることがよく伝わった。こうした皆さんの日常生活に潜む力を、少しずつではあるが、取り戻すことができつつあると思う。仮設住宅を素通りすることなく、ここから始まる「復興」の形は、少しずつではあるが、見え始めているのではないだろうか。

だとすれば、この道筋を少しだけ広げていくこと、斎藤里内仮設のみなさんが2年間に見せてくださった「家族やご近所さん、集落や村などで必要とされるなら、ぜひ自分たちでやろう」という想いや、農を通じて人々をつなぐ力、梅干しや味噌、干し柿づくり、さらにはしめ縄づくりの技や力を活かす形での「復興」を、次へのステップへと発展させることはできないか？ 斎藤里内仮設のみなさんが活躍することで、葛尾村、さらには福島県の復興につながるような展開を、どのように構想すればよいのか、これが次の私たちの課題となる。

○2015年度に向けて、さらなる展開を！

斎藤里内仮設住宅の方々の想いや、かつての葛尾村での日常生活の中で培った手技やコミュニケーション力を活かす「さらなる復興」をどう目指すか？ 私たちの提案は、

- ① 斎藤里内仮設ブランドの農産加工品販売
- ② 「葛尾御膳」の開発とレストランでの提供

の2つである。梅干し、干し柿、味噌等を直売所等で販売することは、きちんとした加工場の整備などを行うことができれば、すぐにでも可能なことである。学生である私たちとしても、梅干しを利用したスイーツやジュースなど、干し柿を利用した柿ジェラートや柿餅など、今後いろいろと提案していくことができるように思う。

また、お正月料理の創作と提供で見せてくれた料理の技は、すぐにでも、レストランで提供できるはずである。干し柿や梅干し、味噌、餅などをふんだんに使った「葛尾御膳」を構想し、ぜひ、多くの方々に食べていただけるような提供の形を考えていきたい。

○復興は、ここ斎藤里内からはじめよう！

仮設住宅を素通りする「復興」ではなく、仮設住宅から始まる「復興」を目指す——2年間の活動で見てきた斎藤里内仮設住宅のみなさんの想いや手技、秘められた力は、そこからはじまる「復興」が十分可能なことを、私たちに確信させてくれたと思う。この2年間で私たちは、みなさんから多くのことを学ぶことができた。それは、どんなことがあってもみんなでつながり、毎日自分のできることをして生きていこう！とする力だと思う。その力が発揮される形は、ナスやトマト、味噌など形として現れるものもあり、料理の知識やしめ縄づくりの手技のように、見えにくいものもある。しかし、私たちの目指す「復興」は、昔からその地域で暮らしてきた人々の「毎日できることをして生きていこう」、とする力を大切にするとところから始まるものである。私たちのスタートラインは、斎藤里内にある小さな仮設住宅ではある。そこから始まる「復興」が、被災地全体の復興につながるのかどうか、疑問に思う方もいるかもしれない。しかし、大きなことは小さなことの積み重ねによって達成されるのではない。私たちは、斎藤里内仮設住宅のみなさんとともに、この小さな取り組みをこれからも積み重ねていくつもりである。そこから始める「復興」こそが、福島が目指すべき「復興」になることを目指して！

最後に、私たちの結論を…

「福島の復興はまず、斎藤里内仮設住宅からはじめよう！」



斎藤里内仮設から
はじめよう

Future From Saito-Satouchi